

## 『新古今集』人麿歌の出典について

喬 鉦 丹

## 一、問題の所在

『新古今集』には七五首の万葉歌(『万葉集』にある歌、及び『万葉集』にないが、『新古今集』には万葉時代の作者の作とする歌を合わせて)がある。その中、作者が人麿とされる歌が最も多く、二三首がある。隠岐本『新古今集』でも人麻呂の歌を一首も切り出すことはなかったことから、人麿歌を尊重する態度が見られる。この二三首の人麿歌には、『万葉集』にある歌は二〇首あるが、一四首は読人不知で、一首は抜気太首歌である。このことから見れば、『新古今集』にある人麿歌は『万葉集』以外の歌集から採録した可能性が高い。そこで、平安時代成立の『人麿集』が注目を集める。『新古今集』全二三首の人麿歌のうち一九首が『人麿集』に見える。特に左は、ある系統の『人麿集』と『新古今集』の編纂との関連性を裏付けられる。

あしがものさわぐ入江のみづのえのよにすみがたき我が身なり  
けり

(『新古今集』・卷一八・雑歌下・一七〇七)

この歌は人麿歌として『新古今集』に収録されたが、『万葉集』には見られず、藤原輔相の作と考えられる国名隠題歌群が混入した『人麿集』<sup>(1)</sup>に見える。鳥田良二<sup>(1)</sup>によれば、当該歌のような藤原輔相の国名隠題歌を増補した『人麿集』が複数系統存在している。そうすると、『新古今集』が国名隠題歌群を有する系統の『人麿集』のいずれかを資料としていたことが推測できよう。本稿では、『新古今集』にある人麿歌の出典、特に国名隠題歌群のある『人麿集』を確認し、『新古今集』が利用した『人麿集』の系統を確認したい。

## 二、『人麿集』伝本の系統について

そもそも『人麿集』は何種の系統があり、国名隠題歌はどんな系

統に存在しているのか。現存の『人麿集』諸本は、「人丸集」・「柿本人麿集」・「柿本集」・「柿本家集」などの書名を持つ。歌数の多少や本文の性格等に基づいて、それをいくつかの系統に分類される。

これら『人麿集』諸本の関係は諸先学によって明らかにされてきた<sup>③</sup>。本稿では、『和歌文学大辞典』の「人麿集」(藤田洋治<sup>④</sup>)の分類に基づいて、『人麿集』諸本の特徴をまとめて紹介したい。

『人麿集』は平安期に編纂された歌集で、伝本は、大きく五類型、七系統に分けられる。第一類本は三系統に分類ができる。第一類本(1)は、上下二巻からなる。上巻は最も早く成立したと考えられる歌群で六三首、さらに下巻として一七八首が付加され、全三二四一首。第一類本(2)(2)は、(1)の本文に、国名隠題歌を付加した形態で、歌数は伝本によって多少の差異があるがほぼ三〇〇首。第一類本(3)は、歌数は一八〇首。第二、三系統の収録和歌は、『古今和歌六帖』や『拾遺集』の和歌を中心としたものが多く見られる。第二類本は第一類本(2)に、万葉歌を補充したもので、歌数は六四四首。和歌を部類別に収録し、「国名隠題歌」を巻末に置く。第三類本は、国名隠題歌「伊賀」一首を採っている。七六六首。第一、第二類本を参考にして、万葉歌をさらに補充し、第二類本と同様、部類別に集成したもの。第四類本は、二九六首。収録和歌からみれば、第一類本に近い関係にあるが、収録和歌や配列、和歌本文に相違が見られる。第五類本は、一四五首。「国名隠題歌」をも含むその所収歌の殆どは、第一類本の(2)と、歌序を甚だしく異にして

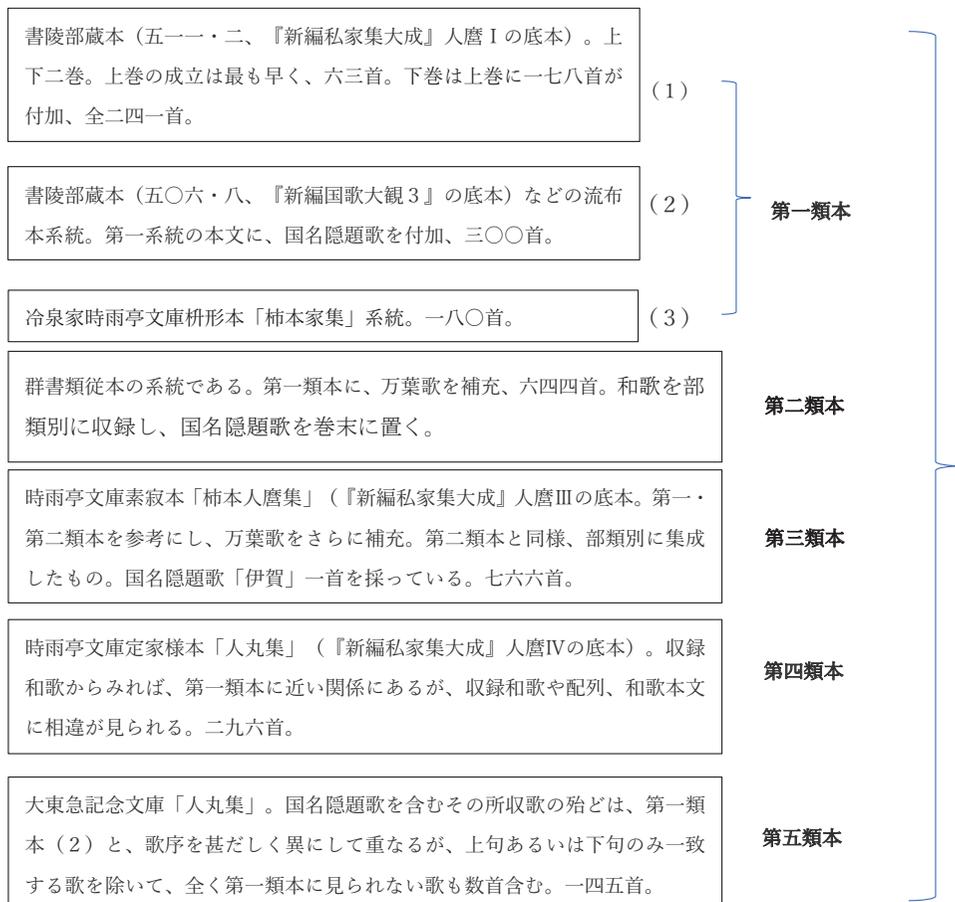
重なるが、上句あるいは下句のみ一致する歌を除いて、全く第一類本に見られない歌も数首含む。

その系統は図一ようになる。

これら『人麿集』諸本の中、国名隠題群を混入されたのは第一類本(2)、第二類本、第三類本、第五類本であるが、第三類本の国名隠題歌は一首で、成立も『新古今集』以降になる。第五類本に『新古今集』人麿歌は二首あり、『新古今集』の本文と一致しない。一方で、第一類本(2)、二類本の成立について、島田<sup>⑤</sup>は、ともに『拾遺集』時代までできていたと主張した。そして山崎節子<sup>⑥</sup>は、二類本『人麿集』の本文を『万葉集』などに存する共通歌と比較し、「Ⅱ類本人麿集の編者は人麿の家集を作るべく、既にあったⅠ類本人麿集、『万葉集』の訓読歌集、『拾遺集』などの資料を集め、勅撰集に真似た部立に従ってその歌を配列した」と指摘した。

ところで、本稿は『新古今集』編纂の過程で参考された『人麿集』の系統を実証的に確かめることを中心とするが、『新古今集』は新編国歌大観(底本は谷山茂氏蔵本<sup>⑦</sup>)による以外に、烏丸本・柳瀬本・隠岐本・為相本・八代集抄本『新古今集』の本文異同も確認した<sup>⑧</sup>。その結果、『新古今集』諸本にある人麿の作とされる歌では、四六四番歌の一首だけに異同があることを確認できた。四六四番歌の分析で『新古今集』諸本の状況について触れる。

『新古今集』人麿歌の出典について



図一

三、本文の異同

『新古今集』人麿歌について、風巻景次郎<sup>(9)</sup>は全二三首の他出を確認して、その中一首は第一類本の(2)中の『人麿集』に見えるから、第一類本の(2)によって人麿作とされたと主張する。風巻は八首の歌を取り上げて本文対照を行い、第一類本の(2)中の『人麿集』が『万葉集』とともに資料として用いられ、それらが同等の資格で認められていたと推測し、『人麿集』第一類本の(2)本文の重要性を示した。しかし、本文対照の部分には、それ以外の系統は論じられておらず、他系統との本文対照も行っていない。後藤利雄<sup>(10)</sup>は、『人麿集』第三類本の状況を中心として論を展開し、勅撰集にある人麿歌と異本『柿本人麿集』（第三類本と同じ系統）との関係も触れた。また、後藤<sup>(11)</sup>は『新古今集』にある二三首の人麿歌が第一類本(2)、第二類本、第三類本にあるかどうかを考察し、その歌番号をあげた。それによって、第二類本の『人麿集』はその供給源の一部であり、第一類本(2)の方は定家の言う三十六人集の中

の上手の歌よみの書の中に入ると思われるので、当然主たる供給源を成すものであると推測した。『人麿集』第一類本(2)・第二類本と『新古今集』の関係を提示した点は重要な指摘だと言えよう。ただし、後藤の論文には二三首の人麿歌の出典を示すだけで、二三首全体について細かな本文分析が行われなかった。さらに島田良二は、『新古今集』の二三首の人麿歌の中に、第二類本には一九首、第一類本(2)には一七首が見え、その一七首はすべて第二類本に含まれると指摘した。第二類本と『新古今集』本文の比較は行わなかったが、正しい示唆と認識すべきである。

つまり、これまでの研究において、『人麿集』第二類本と『新古今集』の関連性を認めるものはあるが、島田良二の論を除き、多くは『人麿集』第一類本(2)の重要性を指摘する。もちろん第一類本(2)は重要であるが、本論文の第二節に言及した『人麿集』第一類本(2)、第二類本以外の五種伝本は十分になされてはいない。特に第五類本は国名隠題歌を含んでいるが、それを含めた分析は、これまで行われていない。表一は、『新古今集』人麿歌の本文・『人麿集』七種の本文・『万葉集』への入集状況等を一覧にしたものである。

注1…『万葉集』の歌番号は旧編国歌大観による。

注2…『新古今集』の歌番号は新編国歌大観による。

注3…データを取るにあたって用いた『人麿集』諸本の本文は以下の通り。

第一類本

(1)…新編私家集大成・人麿Ⅰ(宮内庁書陵部藏本(五一・一二))

(2)…新編国歌大観3・人丸集(宮内庁書陵部藏本(五〇六・八))

(3)…冷泉家時雨亭叢書『詞林采葉抄・柿本家集(枳形本)』(歌番号(アラビア数字)がないため、影印のページを記す)

第二類本…新編私家集大成・人麿Ⅱ(宮内庁書陵部藏本(五〇一・四七))

第三類本…新編私家集大成・人麿Ⅲ(冷泉家時雨亭叢書『素寂本私家集・柿

本人麿集])

第四類本…新編私家集大成・人麿Ⅳ(時雨亭文庫定家様本(人丸集))

第五類本…大東急記念文庫『人丸集』

注4…歌番号の右に付く丸は該当歌が『新古今集』の本文と一致することを意味する。

表一に示した通り、『万葉集』でも人麿作とされる歌は五首存在する(⑫⑬⑭⑮⑰)。そうすると、『万葉集』から採録した可能性のある歌はその五首であろう。一方で、『人麿集』にある歌は一九首で、①④⑨⑱はどの『人麿集』にもない。⑨は『和漢朗詠集』の本文と一致するため、おそらく『和漢朗詠集』から採録したであろう。しかし、ほか三首の典拠は不明であり、今後の課題として残る。

表一

新古今集 巻数・部立・番号	第一類本			第二類本	第三類本	第四類本	第五類本	万葉集巻数・番号・部立	作者表記	
	(1)	(2)	(3)						人麿	その他
①巻三・夏・190										
②巻四・秋上・333	149	146	三二才 (*二八才)	○301	153			巻十・2252・秋相聞		読人不知
③巻四・秋上・346	218	○154	○三三才 (*二九才)	○351	○174			巻十・2277・秋相聞		読人不知
④巻五・秋下・458										
⑤巻五・秋下・459		130	○二八才 (*二四才)	○168				巻十・2220・秋雑歌		読人不知
⑥巻五・秋下・464	127	126	二七才 (*二三才)	104			9	巻十・2186・秋雑歌		読人不知
⑦巻五・秋下・497	110			409				巻十・2134・秋雑歌		読人不知
⑧巻五・秋下・498	108	108	三才 (*五三才)	○408				巻十・2128・秋雑歌		読人不知
⑨巻五・秋下・541								巻十・2210・秋雑歌		読人不知
⑩巻六・冬・582	○131	181	四〇才 (*三六才)	○161				巻十・2196・秋雑歌		読人不知
⑪巻六・冬・657	163	○234		○171	205			巻十・2331・冬雑歌		読人不知
⑫巻八・哀傷・849	45	45	一ニ才 (*四二才)	265	628			巻二・200・挽歌		○
⑬巻十・鞠旅・899	55	55	一四才 (*四四才)	○229	611			巻三・255・雑歌		○
⑭巻十・鞠旅・900	39	39	一〇才	216	649			巻二・133・相聞		○
⑮巻十一・恋一・992	15	15	四才	○297		152		巻十一・2649・寄物陳思		読人不知
⑯巻十一・恋一・993				382	286	90		巻九・1768・相聞		扶氣大首
⑰巻十一・恋一・1050				○311				巻十二・3048・寄物陳思		読人不知
⑱巻十三・恋三・1208								巻十三・3282・相聞		読人不知
⑲巻十五・恋五・1374	7	7	二才	○343	449			巻四・502・相聞		○
⑳巻十五・恋五・1375	72	73		○342	513	293		巻十・1994・夏相聞		読人不知
㉑巻十七・雑中・1650	21	21	六才	○214	206			巻三・264・雑歌		○
㉒巻十七・雑中・1688	154	151	三三才 (*二九才)	511	461			巻十・2294・秋相聞		読人不知
㉓巻十六・雑下・1707		240		○582			85			

#### 四、『新古今集』の人麿歌と『人麿集』諸本

本節は、『万葉集』では作者不詳とされるが、『新古今集』の中で人麿歌として採録された一四首をイからニに分けてその本文を比較して分析する。

イ、複数の系統の本文と一致するもの

『新古今集』の本文が第二類本を含む複数の伝本と一致する歌は五首がある。

③さをしかのいるのの薄はつをばないつしかいもがたまくらにせん  
 撰者注記…雅、通 (巻四・秋歌上・三四六)

さをしかのいるののすすきはつをばないつしかいもかたまくらにせん  
 (第一類本(2)・一五四\第一類本(3)・三三ウ(※二九ウ)\第二類本・三五一・第三類本・一七四)

小男鹿のいるの、す、きはつをばないつしか妹か手枕をせん  
 (第一類本(1)・二一八)

⑤さをしかの妻どふ山のをかべなるわさだはからじ霜はおくとも  
 撰者注記…雅、定、隆 (巻五・秋歌下・四五九)

さをしかのつまとふやまのをかへなるわさたはからししもはをくとも(第一類本(3)・二八ウ(※二四ウ)\第二類本・一六八)

さをしかのつまよぶ山のをかべなるわさ田はからず霜はふれども  
 (第一類本(2)・一三〇)

⑧秋風に山とびこゆるかりがねのいやとほざかり雲がくれつつ  
 撰者注記…雅、定、隆、通 (巻五・秋歌下・四九八)

あきかせにやまとひこゆるかりかねのいやとをさかりくもかくれつつ、  
 (第一類本(1)・一〇八\第二類本・四〇八)

あき風に山とびこゆるかりがねのいやとほざかる雲がくれつつ  
 (第一類本(2)・一〇八)

あきかせにみねとひこゆるかりかねのいやとをさかりくもかくれつつ  
 (第一類本(3)・三オ(※五三オ))

⑩しぐれの雨まなくしふればまきの葉もあらそひかねて色づきにけり  
 撰者注記…雅、定 (巻六・冬・五八二)

しぐれのあめまなくしふれはまきのはもあらそひかねていろつきにけり  
 (第一類本(1)・一三一\第二類本・一六一)

しぐれのあめまなくしふれはまきのはもあらそひかねていろつきにけり  
 (第一類本(2)・一八一)

しぐれのあめまなくしふれはまきのはもあらそひかねていろつきにけり  
 (第一類本(3)・四〇ウ(※三六ウ))

⑪やたののにあさち色づくあらち山みねのあは雪さむくぞ有るらし  
 撰者注記…雅、定 (巻六・冬・六五七)

矢田の野にあさち色つくあらちやまみねのあはゆきさむくぞある

らし (第一類本(2)・二三四/第二類本・一七一)

やたの、のあさち色つくあらち山みねのあは雪さむくそ有らし

(第一類本(1)・一六三)

ヤタノ、ニアサチ色ツクアラチ□□□□ミネノアハユキサムクソアル

ラシ (第三類本・二〇五)

③の第三類本はカタカナ表記であるが、本文の内容は第一類本(3)、第一類本(2)、第二類本と同様、『新古今集』の本文内容と

一致している。第一類本(1)の相違点もそれほど大きくない。⑤

の第一類本(3)・第二類本は『新古今集』の本文と一致する。⑧

の第一類本(1)・第二類本は『新古今集』の本文と一致する。第一

類本(2)の相違点もそれほど大きくない。⑩の第一類本(1)・

第二類本は『新古今集』の本文と一致する。⑪の第一類本(2)、

第二類本は『新古今集』の本文と一致する。第三類本三句目の本文

は現存写本の都合によって判断できないが、相違点が大きくない。

つまり、第一類本(1)・第一類本(2)・第一類本(3)・第三類

本の本文はそれぞれ一首か二首の『新古今集』本文と一致するが、

第二類本の本文はすべて『新古今集』の本文と一致する。

口、第二類本本文のみと一致するもの

『新古今集』の本文と対照したところ、本文が完全に一致する伝

本は第二類本のみという歌が五首見られる。

②あき萩のさき散る野辺の夕つゆにぬれつつきませよはふけぬとも

撰者注記・ナシ (巻四・秋歌上・三三三)

秋はきのさきちる野へのゆふつゆにぬれつ、きませ夜はふけぬと

も (第二類本・三〇一)

秋萩のさきちる野への夕露にぬれてきませよ夜は更ぬとも

(第一類本(1)・一四九)

あき萩のさきける野への夕暮にぬれつつきませ夜はふけぬとも

(第一類本(2)・一四六)

あきはきのさきちるのへのゆふきりにぬれてをゆきをさよはふく

とも (第一類本(3)・三三〇(※二八〇))

アキハキノサキタルノヘノユフツユニヌレツ、キマセヨハフケヌ

トモ (第三類本・一五三)

⑮あしびきの山田もるいほにおくか火のしたこがれつつわがこふら

くは

撰者注記・定、隆 (巻一一・恋一・九九二)

あしひきの山田もる庵にをくかひの下こかれつ、わかこふらくは

(第二類本・二九七)

あし曳の山田もるをのおくかびのしたこがれつつわがこふらくは

(第一類本(2)・一五)

あしひきの山田もるをのおける火の下かくれつ、我こひをらは

(第一類本(1)・一五)

あしひきのやまたもるおのをくかひのしたこかれのみわかこひを

らは (第一類本(3)・(四ウ))

あしひきの山田もるをのくかひのしたこかれにやわかこひをらむ  
(第四類本・一五二)

⑰みかりするかりばのをののならしばのなれはまさらでこひぞまされる  
(第一類本・二四〇)

撰者注記・雅、定、隆 (卷一・恋一・一〇五〇)

みかりするかりはのをの、ならしはのなれはまさらでこひそまされる  
(第二類本・三一一)

⑱なつぐさの露わけ衣きもせぬになどわがそでのかわく時なき

撰者注記・雅、定 (卷一五・恋五・一三七五)

夏草のつゆわけころもきもせぬになどわか袖のかはくときなき

(第二類本・三四二)

かけてのみ露わけ衣きぬものをなとわか袖のかはく時なき

(第一類本(1)・七二)

夏草の露わけ衣きぬものをなとかわが袖のかわく時なき

(第一類本(2)・七三)

ナツクサノツユケコロモキモセヌニワカコロモテノヒルトキモ

ナキ (第三類本・五一三)

なつくさのつゆわけころもきもせぬにわかころもでのひるときも

なき (第四類本・二九三)

⑲あしがものさわぐ入江のみづのえのよにすみがたき我が身なりけり

撰者注記・通 (卷一八・雑歌下・一七〇七)

あしかものさはく入江のみづのえのよにすみかたきわか身なりけり  
(第二類本・五八二)

つづくに

あしがものさわぐ入江の水ならでよにすみがたき我が身なりけり

(第一類本(2)・二四〇/第五類本・八五)

②の第一類本(1)、第一類本(2)、第一類本(3)、第三類本の波線部は『新古今集』とかなり相違している。特に「さきちる」が「さきける」・「さきたる」に、「夕露」が「夕暮」・「夕霧」になり、

歌意も大きく異なる。⑮の二句目について、第一類本の(3)、第四類本はともに「山田もる庵」が「山田もる翁」になり、歌意のレ

ベルで異なりを生じている。そして第一類本(1)、第四類本は下句が異なる。⑰は第二類本『人麿集』のみに見え、本文も一致する。

⑳は、意味として大きな異なりはないが、第一類本は二系統ともに「きぬものを」と『新古今集』の「きもせぬに」と異なっている。

そして第三類本、第四類本は下句が異なる。㉓は国名隠題本で、第五類本にも見えるが、第一類本(2)と同じように、三句目が「水

ならで」とあり、『新古今集』本文と異なる。対して第二類本系『人麿集』の本文は、『新古今集』と一致する。つまり、国名隠題歌を増補した『人麿集』に含めて、イ、ロで分析してきた一〇首の『新

古今集』人麿歌の本文とすべて一致するのが二類本『人麿集』のみである。

である。

ハ、第二類本との類似性がより強いと思われるもの

⑦かきほなる萩の葉そよぎ秋風の吹くなるなへに雁ぞ鳴くなる

撰者注記・雅、定、隆 (巻五・秋歌下・四九七)

かきほなる萩のはさやきふくかせのふくなるなへに雁そなくなる

(第二類本・四〇九)

かきほなる萩の葉さやき吹風の ふくなるなへにかり鳴わたる

(第一類本(1)・一一〇)

⑩いその神ふるのわさ田のほにはいせず心のうちにこひやわたらむ

撰者注記・定、隆 (巻一・恋一・九九三)

磯上ふるのわさ田のほにいてすころのうち恋やわたらむ

(第二類本・三八二)

イソノカミフルノワサタノホニハイテスコ、ロノウチニコフルコ

ノコロ (第三類本・二八六)

いそのかみふるのわさたのほにはいせず心のうちにこふるこのこ

ろ (第四類本・九〇)

⑫秋さればかり人こゆる立田山たちでもゐても物をしぞおもふ

撰者注記・定、隆 (巻一七・雑歌中・一六八八)

あきされはかり人こゆるたつたやまたちでもゐても君をしそおも

ふ (第二類本・五一一)

秋されはかり飛こゆる龍田山たちでもゐても君をしそ思

(第一類本(1)・一五四)

秋さればかりとびこゆるたつた山たつとゐるとにきみこそおもへ

(第一類本(2)・一五一)

あきされはかりとびこゆるたつたやまたつとゐるとにきみをこそ

おもへ (第一類本(3)・三三〇(※二九〇))

アキサレハ雁カリコユルタツタ山 タチテモキテモ君ヲシソ思フ

(第三類本・四六一)

⑦の第一類本(1)の「かり鳴わたる」と「雁ぞ鳴くなる」とは、

大きな違いとは言えないが、一首全体で比べると第二類本と『新古

今集』の相違点の方が、比較的に小さい。⑩の末句は『新古今集』

と第二類本『人麿集』だけが「こひやわたらむ」となる。第三類本

第四類本末句はともに「こひやわたらむ」が「こふるこのころ」に

なり、歌意に及ぶ異なりとなっている。『万葉集』にもこの歌は載

るが、作者や本文の相違が多い。⑫も『万葉集』所収歌だが、その

二句目について、『万葉集』の写本ではすべて「かりとひこゆる」

と訓んでいる。そして作者も『新古今集』と相違する。『人麿集』

をみると、『新古今集』の「かりひとこゆる」は第二類本の表現の

みと一致する。第二類本は「かりとひ」を「かりひと」と転倒した

ものと思われるが、『新古今集』はそれをそのまま採用したのでは

ないかと推測される。末句において、『万葉集』・『人麿集』の各写

本ですべては「物」が「君」となる。

二、特定が困難な歌

出典不明の歌は一首である。

⑥秋さればおく白露に我がやどのあさぢがうはばいろづきにけり

撰者注記・ナシ

(巻五・秋歌下・四六四)

秋されはをくしらつゆにわかやとのあさぢかうれば色つきにけり

(第二類本・一〇四)

あきさればおくしらつゆにわがやどのあさぢがうはいろづきにけり

(第一類本(3)・二七ウ(※二三ウ)／第二類本(2)・二二六)

秋されは置しら露に我宿ををかのかうればいろつきにけり

(第一類本(1)・一二七)

あきなれはをくしらつゆに我やどのあさぢの色はうつろひにけり

(第五類本・九)

『新古今集』でこの歌の作者が人麿とされるのは、『人麿集』から採ったからであると思われる。しかし、当歌の四句目は『人麿集』諸本とは違って、『新古今集』独自の「うはば」となっている。また、柳瀬本(小島)<sup>13</sup>によると、柳瀬本は「隠岐本新古今集」とされるは『万葉集』の写本のうち、類聚古集、紀州本といった次点本の訓と一致する。いずれにせよ、現在流布している『新古今集』本文の原拠は特定できない。

以上は、『万葉集』では作者不詳とされるが、『新古今集』の中で人麿歌として採録された一四首についての分析である。『人麿集』諸本と比較してみると、二の出典不詳歌を除いて、一三首中一〇首が第二類本の本文と一致する。残りの三首について、『新古今集』

の本文と一致する『人麿集』は確認できないが、第二類本との類似性がより大きいことが見てとれた。ここで『新古今集』人麿歌における第二類本の特殊性が確認できる。

## 五、『万葉集』にある『新古今集』人麿歌

それでは、『万葉集』も作者を人麿とする五首については、どうであろうか。『万葉集』の本文については、新編国歌大観に採用された西本願寺本を底本として、非仙覚本系の藍紙本、金沢本、天治本、元暦校本、類聚古集、嘉暦伝承本、伝壬生隆祐筆本、古葉略類聚鈔、紀州本、広瀬本を参照する。

⑫ならのみかどををさめたてまつりけるをみて

久方のあめにしをるる君ゆゑに月日もしらで恋ひわたらん

撰者注記・有

(巻八・哀傷歌・八四九)

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作詞一首并短詞

短歌二首

久堅之 天所知流 君故尔 日月毛不知 恋渡鴨

ひさかたの あめしらしぬる きみゆゑに ひつきもしらず こ

ひわた

るかも

諸本における存否・金沢本、類聚古集本、古葉略類聚鈔、広瀬本、神宮文庫本、紀州本。

類聚古集の前行に「高市皇子殯宮短歌二首 人麿」あり。

古葉略類聚鈔の前行に「高市皇子尊城上殯宮之時柿本人麻呂作哥一首并短歌」あり。  
(万葉集・卷二・二〇〇)

たけちのみかと、しきのかみにかりにをさめるへるときの和歌

久かたのあめにしほる、君ゆへにつきみもしらす恋わたるらん

(第一類本 (1)・四五)

たけちのかみを、しきのかみにかりにをさめたてまつるときのお

た

ひさかたのあめにしぐるる君ゆゑに月日もしらすこひわたるらん

(第一類本 (2)・四五)

たけちのかみをしきにおさめたてまつりけるに

ひさかたのあめにしほる、きみによりつきひもしらす恋わたるかも

(第一類本 (3)・二二オ (\*四一オ))

ならの御かとおさめたてまつりけるをみて

ひさかたのあめにしほる、きみゆへに 月日もしらす恋わたるかも

(第二類本・二六五)

高市皇子ヲ城上ニオサメタテマツルトキノ哥

ヒサカタノアメニシラル、君ユヘニツキヒモシラスコヒワタルカモ

(第三類本・六二八)

⑬ 題しらず 人麿

あまさがるひなのながちをこぎくればあかしのとより山としまみゆ

撰者注記・雅、定、隆

(卷九・離別歌・八九九)

柿本朝臣人麿羈旅歌八首

天離 夷之長道従 恋来者 自明門 倭嶋所見

あまざかる ひなのながちゆ こひくれば あかしのとより や

まとしまみゆ

諸本における存否・類聚古集本、広瀬本、神宮文庫本、紀州本。

類聚古集の前行に別筆「人麻呂」あり。

「コヒクレバ」・類聚古集は「こきくれば」、紀州本は「コキクレハ」。

「ヤマトシマミュ」・類聚古集は「やまとしめみゆ」墨にて「め」

を消して右に「ま」を書いている。(万葉集・卷三・二五五)

あまざかるひなのながちを行みればあかしのとより家のあたりみ

ゆ (第一類本 (1)・五五)

あまざかるひなのながちをこぎゆけばあかしのとよりいへのあた

りみゆ (第一類本 (2)・五五)

あまざかるひなのながちをこひくればあかしのとより家のあたり

みゆ (第一類本 (3)・一四オ (\*四四オ))

あまざかるひなのながちのこきくればあかしのとよりやまとしま

みゆ (第二類本・二二九)

羈旅八首内

アマサカルヒナノナカチヲコキクレハアカシノトヨリヤマトシマ

ミュ (第三類本・六一一)

⑭ 題しらず 人麿

ささのははみやまもそよにみだるなり我はいもおもふ別れきぬれば

撰者注記・雅、定

(巻九・離別歌・九〇〇)

柿本朝臣人麿石見國別妻上来時歌二首并短歌

反歌二首

小竹之葉者 三山毛清尔 乱友 吾者妹思 別来礼婆

ささのはは みやまもさやに さやげども われはいもおもふ

わかれきぬれば

諸本における存否・金沢本、元暦校本、類聚古集本、古葉略類聚

鈔、広瀬本、神宮文庫本、紀州本。

類聚古集の前行に「別妻人麿作反哥集哥石見海」あり。

古葉略類聚鈔の前行に「柿下朝臣人麿石見國別妻上来時短哥」

あり。

「ササノハハ」…類訓の右に朱「サノ、ハ、」あり。

「サヤニ」…元「そよに」。右に朱「サヤ或本」あり。

「ミダレドモ」…元暦校本、金沢本、類聚古集は「みたるとも」。古

葉略類聚鈔、紀州本「ミタルトモ」。(万葉集・巻二・一三三)

いはみの、に、めをわかれてのほりくる時に

さ、の葉やみ山もそよにみたるらんわれはいもおもふわかれきぬ

れは (第一類本(1)・三九)

石見國にめをおきてのぼりてよめる

ささのはもみやまもそよにみたるらんわれはいも思ふおきてきつ

れば (第一類本(2)・三九)

石見のくににめをきてのぼるとよめる

ささのはにみ山もそよとみたるらんわれはいもおもふわかれきぬ  
れは (第一類本(3)・一〇ウ)

石見國にめを、きてのほる時のうた

さ、のははみやまもそよにみたるめりわれはいもおもふわかれき

ぬれば (第二類本・二一六)

イハミノクニヨリメラワカレテノホルトキニ

サ、ノハ、ミヤマモサヤニミタルトモ ワレハイモヲモワカレキ

ヌレハ (第三類本・六四九)

①9 なつのゆくをしかのつのつかのまもわすれずおもへいもが心を

撰者注記・雅 (巻一五・恋五・一三七四)

柿本朝臣人麿歌三首

夏野去 小牡鹿之角乃 東間毛 妹之心乎 忘而念哉

なつのゆくをしかのつのつかのまも いもがこころをわ

すれておもへや

諸本における存否・金沢本、元暦校本、類聚古集本、広瀬本、神

宮文庫本、紀州本。

類聚古集本の前行に「人麿」あり。

「ヲシカノ」…紀州本「ヲ」の上に「サ」を削れる痕あり。

「オモヘヤ」…金沢本「おもふや」 (万葉集・巻四・五〇二)

夏野ゆくをしかのつのつかのまもわすれて思へ妹かこゝろを

夏野行くをしかのつのつかのまも忘れず思ふいもがこころを

(第一類本(1)・七)

(第一類本(3) (二ウ) \ 第一類本(2)・七)

夏野ゆくをしかのつもの、つかの間もわすれすおもへいもかこゝろを

(第二類本・三四三)

ナツノユクラシカノツノ、ツカノマモ イモカコ、ロヲワスレテ

オモヘヤ

(第三類本・四四九)

②題しらず 人麿

ものふのやそ宇治川の網代木にいざよふ浪のゆくへしらずも

撰者注記・雅、定、隆、有、通

(卷一七・雑歌中・一六五〇)

柿本朝臣人麿從近江國上來時至宇治河邊作歌一首

物乃部能 八十氏河乃 阿白木尔 不知代経浪乃 去辺白不母

ものふの やそうぢかはの あじろきに いさよふなみの ゆ

くへしらずも

諸本における存否・類聚古集本、古葉略類聚鈔、広瀬本、神宮文

庫本、紀州本。

類 前行に「柿本朝臣人麿從近江國上來時至宇治河邊作哥」あり

古 前行に「柿本人麿近江國上來時至宇治河邊作哥」あり

「イサヨフ」・広瀬本「不知」の左に朱「タ、」あり。

「ナミノ」・類聚古集本「なみや」。墨にて「や」を消して右に「の」

を書いている。

「ユクヘ」・広瀬本「ヨルヘ」

(万葉集・卷三・二六四)

あふみよりのほりて宇治河のほとりにて

もの、ふの八十うち河のあしろ木に た、よふ浪のよるへしらす

も (第一類本(1)・二一)

あふみよりのほりてうぢがはのほとりにて

ものふのやそうぢ河のあじろ木にいさよふ波のよるべしらすも

(第一類本(2)・二一)

近江よりのほるうちかはのほとりにてよめる

ものふのやそうぢかはのあしろきに た、よふなみのよるへし

らすも (第一類本(3) (六オ)

もの、ふの八十うち川のあしろ木にいさよふなみの行ゑしらすも

(第二類本・二二四)

アフミヨリノホルトテ宇治川ノホトリニテヨメル

モノ、フノヤソウチカハノアシロキニ イサヨフナミノユクエシ

ラスモ (第三類本・二〇六)

⑫の四句目の「つきひもしらで」は『新古今集』独自の表現だと

見られる。ところが、詞書の「ならの御かとおさめたてまつりけ

るをみて」から、『新古今集』と第二類本の関係性が見られる。⑬

の『新古今集』本文と一致する『万葉集』写本は類聚古集と紀州本

の二つである。そして『人麿集』の中に、第二類本、第三類本の本

文は『新古今集』と一致するが、第三類本には『新古今集』のない

題詞を付いている。すなわち、当該歌の原拠は特定できないが、第

二類本、『人麿集』の他に次点本の『万葉集』の可能性もあり得る。

⑭の本文と一致する『万葉集』写本は見られない。特に『万葉集』

三句目の「ども」は逆接の仮定条件を示す助詞で、「例え何があつても、私は妹を一筋に思う」という決意を表現し得た。そして傍線部に示したように、『人麿集』諸本の中、二類本と『新古今集』の一致性がより高い。⑬は『万葉集』に本文が一致する伝本が見られない。そして各伝本の『人麿集』との相違は少ないが、同じ本文となるのは第二類本のみである。⑭の本文は第二類本『人麿集』・万葉写本の類聚古集、古葉略類聚抄、広瀬本と一致する。即ち、『万葉集』でも人麿歌とする五首も、すべてが『万葉集』諸本訓より『人麿集』第二類本に近似し、⑬、⑭、⑯の三首は第二類本の本文と全く一致する。残りの⑫、⑮と一致する写本はないが、『人麿集』第二類本との類似性がほかの写本より高い。

### まとめ

今までの研究の多くは第一類本(2)、第二類本が『新古今集』人麿歌の参考資料として認めており、第一類本(2)を重要視している。本稿は、現存『新古今集』人麿歌の本文・『人麿集』七種の本文・『新古今集』人麿歌を人麿作と見なす新点本以前の『万葉集』写本の本文を対照し、『新古今集』人麿歌の供給源として、『人麿集』第二類本の重要性を確認した。

『万葉集』では人麿作ではない歌一四首については、『新古今集』編纂時には、国名隠題歌を増補した第一類本第二系統・第二類本・

第五類本のいずれかの『人麿集』を利用したと考えられるが、その三本を含めて、最も多く(一〇首)の『新古今集』本文と一致するのは第二類本であることが分かった。残り四首中三首も、第二類本と『新古今集』の本文が近似することも指摘できた。さらに、『万葉集』でも人麿作とされる五首も、『新古今集』の本文と比較すると、五首中三首が『人麿集』第二類本と一致し、ほかの二首についても、『人麿集』第二類本との類似性が高いことが見てとれた。つまり、『新古今集』人麿歌は、第二類本『人麿集』との一致性がより高く、『万葉集』でも人麿作とされる和歌も含めて、人麿歌はほぼすべて第二類本から採っていると考えられることになる。

『新古今集』人麿歌の研究において、二類本の重要性が認められるべきであろう。また、撰者注記から見ると、多くの撰者が『新古今集』人麿歌を選んでいるが、最も多く採録したのは雅経と定家で、二人とも一四首の歌を採録したことがわかる。定家独自の採歌がないのに対して、雅経は二首の歌を単独で採録した。幼時から父の俊成より歌学的な教養に恵まれた定家が人麿歌を多く採録することは理解できるが、雅経はどのような作歌経歴によって人麿歌に関心を寄せたのか、今後の課題として注目したい。

### 注

(1) 日本文学ウェブ図書館・『人麿集』解題

(2) 『人麿集』に増補した歌について、久曾神昇「人麿集の本文校訂」(愛知

大学文学論叢、一九七二、三)は「輔相の家集としては藤六集が伝存するが、この歌〔拾遺集〕三七五番歌〕は見あたらない。しかし藤六集は、すべて物名歌であり、拾遺集所載の輔相の歌も、すべて物名歌であることを思へば、これらは輔相の歌と推定すべき」と述べている。

(3) 『人麿集』の先行研究には、次のような諸論が著積されてきた。

後藤利雄『人麿の歌集とその成立』(至文堂、一九六一)。

山崎節子『人麿集の成立と拾遺集』(中古文学、一九七九、十)

山崎節子『人麿集諸本の成立』(国語国文、一九八一、八)

島田良二『人麿集全釈』(風間書房、二〇〇四)

竹下豊『私家集大成』・『人麿集』解題(明治書院、一九七三―一九七六)

橋本不美男編 御所本三十六人集解説(新典社、一九七二)

竹下豊 素寂本私家集・西山本私家集解説(冷泉家時雨亭叢書、第七二卷)

(朝日新聞社、二〇〇四)、詞林采葉抄 人丸集解説(冷泉家時雨亭叢書、

第七八卷)、(朝日新聞社、二〇〇五)

藤田洋治『大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇・和歌Ⅲ』、「人丸集」解題

(4) 藤田洋治『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一四)

(5) 島田良二『平安前期私家集の研究』(桜楓社、一九六八)

(6) 山崎節子『人麿集諸本の成立』(国語国文、一九八一、八)

(7) 新編国歌大観卷一・『新古今和歌集』

(8) 久保田淳『新古今和歌集全注釈』(日本古典評釈・全注釈叢書)(角川学

芸出版、二〇一一)、峯村文人校注『新古今和歌集』、(新註国文学叢書)(大

日本雄弁会講談社、一九五〇)を参考。

(9) 風巻景次郎『新古今時代』(京都・人文書院、一九三六)

(10) 後藤利雄『異種本柿本集の研究』(山形大学紀要・人文科学、一九五二、三)

(11) 後藤利雄『人麿の歌集とその成立』(至文堂、一九六一)

(12) 島田良二『平安前期私家集の研究』(桜楓社、一九六八)

(13) 小島吉雄『新古今和歌集の研究』新日本図書、一九四四)